



〈雑録〉英國ニ於ケル企業市營ノ状況

坂西, 由藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 1(4):562-573

(Issue Date)

1906-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051057>



英國ニ於ケル企業市營 ノ狀況

神戸高等商業學校
教授 商業學士 坂西 由藏

我邦ニ於テハ、所謂公的企業ガ漸ク私的企業
ヲ蠶食シ、『官有』、『官業』、『國有』、『國營』、若ク
ハ『市有』、『市營』ハ近來ノ流行ヲナスモノニ似
タリ。殊ニ、都市ノ發達膨脹ニ伴ヒテ市ノ成ス

ベキ事業益々多ク、從テ市費愈々増加スベキガ故ニ、市街鐵道、電燈、瓦斯等ノ企業ヲ市營シテ以テ歲入ノ増加ヲ圖ルコトハ今後一層盛ナルニ至ルノ事情ナシトセズ。サレバ、今英國ニ於ケル企業市營ノ狀況ヲ觀察スルモ又必ズシモ無用ノ業ニ非ル可シ。

此問題ニ就テハ、本年五月發行ノ Journal of Political Economy ノ誌上ニ於テ Everett W. Burdett ガ "Municipal Ownership in Great Britain" ト題シテ其ノ研究ノ結果ヲ公ニセルモノアリ。氏ハ近時米國ニ於テ企業市有ノ論漸ク盛ナリトナシ、曰ク『此國(米國)ニ於テ市有問題

ニ關スル議論ハ概テ英國ノ經驗ヲ基礎トセザルナク、論者ハ英國ガ此ノ制度ニヨリテ満足ナル結果ヲ收メ得タルモノト信ジ、米國モ亦須ラク之ヲ採用スベシト唱導ス。蓋シ英國ニ於ケル是ガ現狀ト其ノ成否トニ關シテハ人ニヨリテ各々其ノ見ル所ヲ異ニシ、正確ナル說述トシテ信憑スルニ足ルベキモノ稀ナリ。サレバ自ラ彼ノ地

ヲ蹈ンデ根本材料ニ就テ是ガ研究ヲ遂ゲ依テ以テ其ノ實情ヲ明カニセントスルノ念ハ、予ヲシテ昨年ノ夏渡英ヲ企テシメタル所以ニシテ、本論ハ即チ予ガ英國ニ於テ集メ得タル材料ニ基キテ起草セルモノニ係ル』ト。

氏ガ本論ニ於テ主トシテ觀察セルハ電氣事業及ビ瓦斯供給ノ事業ニシテ、先ヅ此等ノ企業市營ノ現狀ヲ述ベテ其ノ能ク成功シタリト云フヲ得ベキヤ否ヤニ答ヘ、而シテ此ノ制度ヲ米國ニ採用スルノ可否ニ論及セリ。以下同氏ノ說ニ據リテ唯其ノ事實ノ概略ヲ摘記シテ參考ニ供セントス。

一

道路、橋梁、下水道等ノ建設竝ニ修築ハ都市ガ當然成スベキノ事業ナリ。今述ベントスル所ノモノハ之ト異ナリ、所謂 "reproductive undertakings" ト稱シ、市ノ投資ニ對シテ多少ノ收入ヲ生ズルモノ是ナリ。英國ニ於ケル此種ノ市營事業ハ其ノ行ハル、範圍頗ル廣ク、都市ガ通常

企ツベキ事業ノ範圍ヲ超脱スルコト甚シキモノアリ。水道、瓦斯、電燈、市街鐵道、市場、浴場、住宅、港灣、埠頭、橋錢ヲ收ムル橋梁、運河、渡船等ノ重ナル準營利の事業ヲ始メトシ、電話、劇場、倉庫ノ類ヨリ墓地、火葬場ノ類ニ至ルマデ其數枚舉ニ遑アラザルナリ。今其重ナル市營事業ノ數ヲ見ルニ、

水道	瓦斯製 造所	發電 所	市街 鐵道	船渠
一八九九年ニハ	八〇〇	二五〇	一〇〇	五〇
ナリシガ			三	

一九〇三年ニハ 一、〇四五 二、六 三、四 一、四三
ニ増加シ、其投資額約十六億萬圓ニ上レリト云フ。

二

斯ノ如クシテ公的企業ノ使用人ノ數、竝ニ市ガ之ガ爲メニ支出スル所ノ經費頗ル増加シ、延イテ私人ノ財産ハ益々高ク評價セラレテ市税ノ負擔額ヲ増加シ、且ツ後ニ述ブルガ如キ不都合アルニヨリ、近時一般ノ輿論ハ市營事業ニ制限

ヲ加フルコトヲ要求スルニ至レリ。此點ニ關シテ殊ニ注目ヲ值スルハ、『ロンドンノ市費ニ關スル焦眉ノ問題』ヲ研究センガ爲メニ千九百〇五年七月二十日ロンドンニ開カレタル集會ナリ。此ノ集會ハ『ロンドン、タイムス』ガ『ロンドンニ於ケルアラユル産業ノ正當ナル代表者』ト呼ベルモノニシテ、其ノ議長タリシ Duke of Norfolk ハ『ロンドンノ市費ハ千八百九十二年ノ千二百萬磅ヨリ、其後十年ニシテ二千四百萬磅ニ増加セリ。而モ之ニヨリテロンドン市ノ利益ガ眞ニ増進セラレタルモノト謂フベカラズ、其ノ實ハ反ツテ是ガ發達ノ階段ガ阻マレタルヲ見ル』ト述ベタリ。殊ニ Lord Hamilton ガ "No municipality should undertake any project with the ratepayer's money which could be done as well or better by private enterprise." (自治體ハ其ノ住民ニ課税シテ得タル資金ヲ以テ、私人ノ企業ニ一任シテ能ク若クハヨリ良ク行ハレ得ベキ事業ヲ企畫スルガ如キコトアルベカラズ) ト

云ヘル所論ハ最モ大ナル喝采ヲ博シタリキ。而シテ『ロンドン、タイムズ』ハ曰ク『今日租稅的收入ニヨリテ遂行セラレツ、アルモノニ比スレバ更ニ一層緊切ニシテ而モ私人ノ企業ニ一任スル能ハザル事業ヲ成サル可カラザルニ至ルハ蓋シ遠キ將來ノコトニ非ルベシ』ト。以テ輿論ノ向フ所ヲ察ス可キナリ。

三

英國ノ都市ノ營ム公的企業中ニテ電氣事業ハ概シテ云ヘバ適當ノモノヲ適當ノ價ニテ供給スルノ點ニ於テ成功ヲ得タルニ庶幾シ。ポストンノ R. S. Hale 氏ノ精密ナル調査ニ據レバ、電燈事業ガ都市ニヨリテ經營セラル、ハ私人ニヨリテ營マル、ニ比シテ幾分カ消費者ノ爲メニ利益ナルガ如シ。シカモ、消費者ノ利益ノ點ヨリ觀テ其ノ都市ノ企業ニ屬スルカ私人ノ企業ニ屬スルカニヨリテ生ズル所ノ差異ハ左マデ大ナルモノニ非ズ。否、私的企業ガ都市ノ企業トノ競爭上其ノ出發點ニ於テ不利益ノ地位ニ立テルコト

ヲ見レバ、如上ノ差異ヲ生ズルハ寧ロ當然ノ事ニ屬ス。加之、ロンドンニ在ルモノハ例外トシテ、大都會—營業區域トシテ有利ナル—ニ於テハ此種企業ハ市ノ自ラ營ム所ニ係リ、私的企業ノ營業區域トシテ許サル、ハ殆ンド凡テ小都會ニ限ルモノナリ。

此點ニ關シテ尙ホ注意セザルベカラザルコトアリ。曰ク、都市ノ營メル企業ニシテ成功ヲ得タルモノハ、元ト私設會社ノ營業ヲ買收シ之ヲ繼承セルモノ少ナカラザルコト是ナリ。リーヅ（一八九六年ノ人口三十九萬）、及ビリヴァープール（同年ノ人口五十二萬）ハ其著シキ例ナリ。遮莫、電燈ニ關スル都市企業ノ成功ハ、未ダ一般公衆ヲ利スルニ足ラズ、唯比較的少數ノ消費者ヲ利シタルノミ。加之、如上ノ成功ハ他ノ方面ニ於ケル失敗ヲ償フニ足ラザルヲ奈何セシ。

蓋シ英國ニ於テ假ニ私人ノ企業ヲシテ之ニ當ラシムルモノトセンカ、猶ホ克ク都市ノ企業ト

大差ナク若クハ反ツテ廉價ニ電氣ヲ供給スルコトヲ得ザルノ理ナシ。

サレバ之ヲ事實ニ徴スルニ、私人ノ企業ニ一任セラル、場合(其例少ナケレドモ)ニ於テハ、其結果都市自ラ之ヲ營ム場合ニ譲ラズ、否之ニ優ルコトナキニ非ズ、又之ニ反シテ私的企業ガ市營企業ニ劣ル場合アリトセバ、其ハ實ニ法律ガ兩者ヲ遇スル所ノ條件ノ差異ニ基カズンバアラザルナリ。

次ニ瓦斯事業ニ就キ一瞥セン此ノ事業ハ電氣事業ノ例ト異ナリ、私設會社ガ自治體自ラ之ヲ營ム場合ト殆ンド同一ナル條件ノ下ニ其ノ業ヲ營ムヲ得ルガ故ニ、公私企業ノ供給スルモノノ價ヲ比較スルニ於テ電氣事業ノ場合ヨリモ公平ナル計數ヲ以テスルヲ得。

千九百〇五年出版ノ市政年鑑(Municipal Year Book)ニ據リテ、千九百〇二年ヨリ三年ニ至ル年度間ニ英國ニ於テ公設瓦斯製造所ノ供給スル瓦斯ノ價ト私設會社ノ供給スル瓦斯ノ價トヲ比

較スルニ、千立方「フィート」ニ付平均前者ハ二志八片、後者ハ二志十一片ニシテ、即チ其ノ差ハ千立方「フィート」ニ付約十二錢ナリ。

今、(一)ロンドンヲ除ケバ大ナル瓦斯事業ハ都市ノ經營スル所ナルコト、及ビ(二)ロンドンニ於ケル石炭ノ價及ビ勞銀ガ市營瓦斯製造所ヲ有スル都市ニ比シテ遙ニ高キコトノ二事實ヲ顧ミレバ、上記ノ計數ニヨリテ示サル、結果ハ寧ロ私設瓦斯會社ノ成績ノ良好ナルコトヲ證スルモノト謂フ可キナリ。

又 Field ノ Analysis ニ據リテ地方ニ於ケル重ナル公私瓦斯製造所ノ供給スル瓦斯ノ平均ノ價ヲ比較スルニ、公設ニ依ルモノ千立方「フィート」ニ付二志三片半、私設ニ委スルモノハ二志一片半ニシテ、之ヲ平均燭光ノ價ニ就テ云ヘバ前者ノ九片ニ對シテ後者ノ八片ナルヲ見ル。

四

上記ノ如ク英國ニ於ケル公的企業ノ中ニハ電氣供給ノ事業ノ如キ或ル點ニ於テ成功ヲ得タル

モノト看做シ得ベキモノアリ。シカモ、之ニ伴フニ幾多ノ惡結果ヲ以テセリ。就中

(一) 當該産業ノ發達ヲ阻害セルコトハ其最モ甚シキモノナリ。思フニ英國ニ於ケル電氣事業ノ發達頗ル遅々タルハ一般ニ認メラル、所ニシテ、又之ヲ證明スルコト容易ナリ。 Institution

of Electrical Engineers ガ去ル千九百〇二年ニ設ケタル調査委員ノ報告ニ曰ク『英國ガ具備スル所ノ自然的條件ノ良好ナルニ鑑ミ、又此國ニ於ケル資本ノ増殖、勞働ノ能力竝ニ他ノ幾多ノ機械的技術ニ於テ發明ノ技術ノ見得ベキニ顧ミレ

國名	電燈電力供給高	牽引用電力供給高	送電裝置アル軌道哩數
英國	1100'000	50'000	900
歐洲大陸諸國	500'000	150'000	50'000
米國	1'100'000	800'000	21'000

即チ、英國ノ二倍ニ滿タザル人口ヲ有スル米國ガ、何レノ點ニ於テモ比例以上ニ英國ニ優ル所アルヲ見ル可シ。尙ホ仔細ニ英米兩國ノ電燈、電車、電話事業ノ發達ノ跡ヲ比較スルニ立法、

ハ電氣事業ガ獨リ進歩ノ趨勢ニ伴ハズ未ダ英國現在ノ一般産業發達ノ階段ニ到達セザルハ毫モ疑ヲ容レザルノ事實ナリトス。而シテ千九百〇二年三月二十五日同委員ノ決議ニ曰ク『英國人ガ電氣學上發明發見ノ才ニ富ムノ點ニ於テ克ク世界第一流ノ範ニ屬スルニ拘ハラズ、其國民ノ産業上社會上ノ必要ニ應ジテ之ヲ實際ニ應用スルノ點ニ至テハ、他ノ諸國ノ現狀ニ比シテ遙カニ進歩ニ後ル、モノト云ハザルベカラズ』ト。委員ノ下シタル此結論ハ次表ニヨリテ之ヲ證明スルコトヲ得ベシ。

電車數	供給電力總數	人口	投資額
11'000	250'000	40'000'000	350'000'000
98'000	550'000	350'000'000	850'000'000
6'000	11'000'000	70'000'000	110'000'000

行政ガ公的企業ノ發達ヲ助長シテ私的企業ヲ抑ヘタル英國ガ私人ノ企業ニ放任セル米國ニ及バザルコト頗ル遠キコトヲ知ル。加之、(二) 英國資本家ガ此等事業發達ノ爲ニ投資セ

ル額甚ダ少ク、電氣事業用機械ノ製造工業亦甚ダ盛ナラズ。英國ニ於ケル電氣機械ノ製造ハ到底米獨兩國ニ於ケル發達ノ現狀ト同日ノ論ニ非ルナリ。

蓋シ私人ノ資本ト熟練トヲ以テ經營スルニ非ズンバ、新興ノ企業ガ充分ナル發達ヲ遂グル能ハザルヤ必セリ。公ナル吏員ハ自ラ新事物ヲ發明シ、開發シ、是ガ發展ヲ圖ルモノニ非ズ、發明、發見、創意、發展等アラユル進步ノ魁ハ實ニ營利ノ念ニ動カサル、私人ノ力ニ俟ツモノ多シトス。見ヨ、英國ニ於テスラ水道、瓦斯、運輸電氣等ノ事業ガ凡テ先ヅ私人ノ企業トシテ起リタルモノナルコトヲ。即チ、英國ノ重ナル都會ニシテ自ラ水道ヲ建設セルモノハ僅カニ十二ニ過ギズ。瓦斯事業ハ元ト私人ノ經營ニ係リ其ノ自治團體ノ手ニ移ルニ至リシハ僅カニ數十年前ノコトニ係ル。而シテ今日自治體自ラ經營スル所ノ市街鐵道事業ハ元ト私人企業ニ屬シ後買上ゲラレタルモノ其大部分ヲ占ムルナリ。電氣事

業ニ就テ云フモ、元ト瓦斯事業ヲ營メル都會ガ私人企業ヲ倒シテ之ニ先ンセンガ爲メニ電燈事業ヲ企畫スルノ已ムナキニ至レルモノトス(但シ、之ニ拘ハラズロンドン、リヴァプール、シエツファイルド、バーミンガム、ノツチンガム、ニユーカッスル等重ナル都會ニ於テ私設電氣會社起レリ)。

新事業ヲ起スニ當リ私人ノ資本家ノ缺ク可カラザルコトハ、電氣技師 A. A. C. Swinton ガニユーカッスル、ラン、タイン(千八百九十六年ノ人口二十一萬二千)ヲ引例シテ説明セル所參考ニ値ス。同市ニ於テハ私設電氣會社設立ノ條件比較的寛大ナル爲メ是ガ經營ニ要スル資本ヲ得ルコト容易ナリシト云フ。氏曰ク『若シ私人ノ企業ニシテ自由ノ活動ヲ認メラレンカ、其ノ大會ニ起リテ成功ヲ得ルニ至ルコト期シテ待ツベシ。私人ノ企業ハ先ヅ電氣事業ノ成立ヲ希望スル資本家ヲ誘テ之ニ投資セシメ、延イテ電氣製造工業、其他一般電氣業發達ノ爲メニ進ンデ其

資本ヲ提供スルニ至ラシム可シ。シカモ、英國ニ於テハ此等事業經營者トシテ自治體ガ優先權ヲ有スルノ事實ハ全ク反對ノ結果ヲ惹キ起セルヲ奈何セン』ト。又昨年七月ロンドンノ集會ニ於テ Lord Claude Hamilton ハ曰ク『今日自治體ガ租稅的收入ヲ以テ自ラ事業ヲ經營シ依テ以テ排斥シ得タル私人ノ企業ト私人ノ資本トハ、私人企業ガ當ニ起リ私人資本ガ當ニ投ゼルベキ地方ヲ捨テ、其ノ方向ヲ轉ゼリ。サレバ此點ニ關スル自治體ノ行動ハ一般經濟社會ノタメニ結局不當ナリト斷ゼザルベカラズ』ト。

(三)英國ニ於ケル公的企業ノ經營其ノ宜シキヲ得ザル第三點ハ瓦斯電燈等ノ供給ガ都會ノ一部ニノミ普クシテ他ノ部分ニ及バズ、其分配當ヲ失スルコト是ナリ。是レ即チ少數者ノ利益ノタメニ多數者ヲ犠牲ニ供スル所以ニシテ、都會人口中其ノ多數ヲ占ムル非消費者ハ何等ノ恩澤ニ浴セズ、比較的少數ナル消費者ヲシテ舉ゲテ其利益ヲ擅ニセシムル所以ナリ。吾人ノ見ル所

ヲ以テスレバ、瓦斯ノ價五十仙ニシテ五千乃至一萬ノ人口ニ之ヲ供スルニ比スレバ、其價一弗ニシテ克ク十萬ノ人口ニ之ヲ供スルヲ優レリトシ、鐵道賃率ヲ三仙ニシテ少數者ノ便ヲ計ルハ、賃率五六仙ニシテ多數者ノ便ヲ計ルノ優レルニ如カザルナリ。電燈ニ就テ之ヲ見ルモ成ル可ク多數者ノ之ヲ利用シ得ルニ非ズンバ、其ノ公的企業ハ未ダヨク成功ヲ得タルモノト謂フベカラズ。試ニ英米兩國ニ於ケル電燈供給ノ狀況ヲ比較スレバ左ノ如シ。

英國		米國	
グラスゴー	六、四三三	ボストン	五、七五七
エジンバラ	三、六四九	ニューヨーク	二、五〇六
マンチエスター	五、四九六	シカゴ	一、六八五
リバープ	四、八九三		
バーミンガム	五、三二二		
合計	二、五七二	合計	一、三〇六
	四、〇〇〇		一、一四〇
	三、六〇〇		二、八四六
	三、〇〇〇		一、五〇〇
	一、五四〇		
	一、三〇〇		
	三、九八		
	五、一七一		
	二、三七四		
	二、七九六		
	一、五二六		
	九、三三四		
	七、二九		
	五、一七一		
	三、九八		
	二、三七四		
	二、七九六		
	一、五二六		
	五、〇〇〇		

人口 十六獨光ヲ
ンブ裝置數
使用者
ノ數

前表ノ英國都會ハ何レモ公的企業ニヨリ、米國都會ハ私設會社ニヨル、而シテ例ヘバ人口六十萬ニ滿タザルポストンガ一都會ヲ以テシテ使用スル「ランブ」ノ數ハ英國ノ五大都會(ロンドン以外ノ)ガ併セテ人口二百數十萬ニシテ使用スルモノト甚シキ徑庭ナク、前者ハ後數者ニ於ケル半數以上ノ使用者ニ電燈ヲ供給シツ、アルヲ見ル。此類ノ比較ハ讀者自ラ前表ニ就テ研究セラルベシ。

又英國ノミニ就テ公私企業ノ成績ヲ見シカ、私設會社ノ經營ニ委テルニューカッスル(人口約二十二萬)ト市營ニヨルダブリン(人口約二十九萬)ウエスト、ハム(二十七萬)、ダンディ(十六萬)、レスター(二十二萬)、サルフォールド(二十二萬)、アバヂーン(十六萬)、カーデツフ(十六萬)、ノツチンガム(二十四萬)トヲ比較スルニ、ニューカッスルノ人口ハ他ノ八都會平均人口ト相伯仲シ、而シテ同市ニ於ケル二個ノ私設電氣會社ヲ以テシテ克ク他ノ八都會平均消費

者數ノ約三倍ノ需要ニ應ジ、二倍半以上ノ電燈ヲ供給シ、六倍以上ノ電力ヲ起シ、殆ンド五倍以上ノ電流ヲ賣捌キ、其ノ受クル所ハ代價ハ三割三分以上低廉ナルヲ見ル。

其他此種ノ統計ニヨリテ企業ノ成功ニ通常缺クベカラザル營利的ノ精神竝ニ活動ノ存スルト否トガ如何ニ重大ナル差異ヲ其ノ成績ノ上ニ限ハスヤヲ察スルコトヲ得。若シ市營企業ニシテ失敗ヲ招カンカ、其ノ企業ノ恩澤ヲ蒙ラザル非消費^{コンシューマー}者ハ市費負擔者トシテ課税ノ増加ニ苦シマザルベカラズ。彼等ハ自己ニ何等ノ利益ナクシテ設立セラレタル企業ノ強制的社員トセラレ、利潤アレハ多少自己ノ利益トナレド之ニ反スレバ徒ラニ損失ヲ負擔セザルベカラザルモノト謂フ可シ。

(三)次ニ此等市營企業ノ財政上ノ現況ヲ見ルニ概シテ收支相償ハザルモノヲ多シトス。千九百〇四年十二月三十一日英國ニ於ケル公私電燈業ノ成績左ノ如シ。

調査數

市營 一八三
私設 六六

利益ヲ得タル企業

一八三

損失ヲ招キタル企業

一〇五

利益額總計

二七〇〇〇

損失額總計

八三〇〇〇

差引利益超過額

一八七〇〇〇

利益ヲ得タル企業數ノ百分比例

五二

損失ヲ招ケル企業數ノ百分比例

四三

一企業ニ付平均利益額

七六

見ル可シ、市營企業ノ成績ガ私設會社ノ成績ニ
比シ甚シク劣レルコトヲ加之、市營企業ハ固定
資本ノ減價ト積立金トノ二項目ヲ見積ラズシ
テ、辛フジテ如上ノ成績ヲ示シ得タルニ過ギザ
ルノミ。Lord Avebury (前ノ Sir John Lubbock

ニシテ現ニ London County Council ノ副議長タ
リ)曰ク、『此年度ニ於テ減價及ビ積立金トシテ
充分ナル金額ヲ見積リタルモノハ稀ナリ。グラ
スゴーニテハ其ノ損失額ヲ假勘定ニ移シ一時
ヲ彌縫シ、其他ノ都會ニテハ其損失額ヲ或ハ地
方ノ一般基金ヨリ補ヘルモノアリ、或ハ其ノ一

部分ハ此方法ニヨリ殘額ハ次年度ニ繰リ越セル
モノアリ』ト。

又 Sir Henry Fowler 氏ガ下院ニ提出セル報
告書ニ據レバ、近時イングラント及ウエールス
ニ於テ市有市營ノ水道百九十三、瓦斯製造所九
十七、電氣工場一〇二、市街鐵道二十九ニ就キ、
其ノ年々ノ減價見積額ハ近年著シク少ナク、最
初ノ放下資本ニ對シテ平均一「パーセント」ノ十
分ハ二ヲ下リ、資本額ヨリ收益ヲ控除セル殘額
ニ對シテモ辛フジテ一「パーセント」ノ十分ノ二
ヲ超フト云フ。

グラスゴーノ市營電話事業ノ計算書ヲ檢查セ
ル計算人ハ『其ノ收入中ヨリ減價見積額トシテ
差引カレタル金額ノ少キニ過グルコト』ヲ幾度
モ注意セリト云フ——但シ其後出版セラレタル
報告書ニハ前記ノ注意ハ全ク省略ニ附セラレ了
ヌ！今、假ニ減價トシテ年々五分ヲ見積ラバ
五箇年間ニ五萬七千磅ニ上ル。而ノ其創業費金
九千九百七十五磅ハ未ダ毫モ償却セラレズ。即

チ兩科目ノ合計六萬六千九百七十五磅ヲ現存ノ減價償却積立金六千六百八十磅ト差引セバ、五箇年間ニ實ニ六萬磅以上ノ缺損ヲ見ル。グラスゴー電話事業ノ此ノ成績ハ英國ニ於ケル市營企業ノ好典型ナリ。

(五) 次ニ注目スベキハ英國ニ於ケル自治體、聯合會是ナリ。此聯合會ガ市營企業ノ勁敵タル私人ノ企業ヲ壓センガタメニ、一般行政上ニ振フ所ノ勢力頗ル大ナルモノアリ。之ニ加フルニ、(六) 市營企業ノ使用人ガ市ノ公職ノ選舉會ニ於ケル投票數頗ル多ク、相率キテ私營企業ノ現狀維持若クハ擴張ニ力ヲ寄スルモノトス。

斯ノ如クシテ市營企業益々盛ニシテ市費從テ激增スルニ伴ヒ

(七) 市債ノ増加ト市税ノ増徴トハ免ルベカラザル所ナリ。例ヘバ英國ノ鐵道ガ所得税其他ノ國税以外ニ市税トシテ支拂ヘルモノ、千八百九十一年ヨリ千九百〇三年ニ至ルマデニ凡ソ倍額ニ達セリト云フ。又グラスゴーノ人口ハ過去

十一年間ニ一割六分ヲ増セシガ、課税ノ爲ニ財產ノ評價額ノ増加セル比率四割五分ニ及ビ、租税ヲ増徴スルコト十一割二分ニ上リ、市債ノ増加ハ十一割九分ニ達セリ。而テ其ノ間市有財產ノ負債ニ超過セル額ハ僅ニ一割ヲ増セシノミ。更ニイングランド及ビウエールス全體ニ於テ租税ヲ負擔スベキ財產ノ價格及ビ地方税ノ増加ノ狀況ヲ示セバ左ノ如シ。

擲稅價格	課稅ノ割合	人口一人ノ負擔額
一八五五年	二五・五	一磅二付
一九〇〇年	二五・五	四二・一
同	同	五・七

五

以上ハ英國ニ於ケル市營企業ノ概況ニシテ、其ノ斯クアラシメタル原因トシテパーデットガ第一ニ舉グル所ノモノハ英國ノ立法行政ガ私人ノ企業ヲ仰ヘテ市營企業ノ發達ヲ助長シ、殊ニ電氣事業ノ如キハ私設會社ガ一定ノ年限營業シタル後自治體ガ之ヲ買上グルノ權利ヲ認メタルコト是ナリ。第二ニ瓦斯事業市有制度ノ存在ハ

市ヲシテ私人ガ電燈ノ如キ新事業ヲ起スコトヲ妨害スルニ至ラシメ、シカモ市自ラ電燈業ヲ營マズ又タトヒ之ヲ起スモ久シク躊躇シテ、其ノ間一般公衆ノ希望ヲ實ニセザルモノアリ。而シテ第三ニ産業ノ發達ニ必要ナル營利的精神ノ缺乏ハ市營企業失敗ノ一因タルヲ失ハズ。殊ニ其ノ經營者ハ直接ノ利害關係者ニ非ズ、自ラ事物ヲ判斷シテ臨機應變ノ處置ニ出ヅルノ權ヲ有セザルガ爲メニ、其ノ經營施設ガ時機ヲ失スルコト往々ニシテ之アリ。

最後ニバーデット氏ハ英國ニ於ケル企業市營ノ制度ヲ米國ニ植殖スルコトノ可否ニ論及シテ、全然之ヲ否認シ、米國ガ現ニ行ヒツ、アル如ク産業界ヲ舉ゲテ私人ノ資本ニヨル私人企業ノ開拓ニ委スルコトノ最モ健全ナル政策ナルコトヲ述ベタリ。此點ニ關スル氏ノ所說ハ茲ニハ省略ニ附セリ。